

このたびの東日本大地震において被災された方々には心からお見舞い申し上げます。

一日も早く回復・復興されることを切にお祈りし、不幸にもお亡くなりになられた方々のご冥福を念ずるばかりである。

それにしても地震のものすごさ、恐ろしさは言葉に尽くせない。現代の科学技術の成果をもとに構築したはずの原子力発電所の保安施設すら破壊をまぬがれない現実を目の前にすると、人間の知識や技術の限界が見えるようで悲しくなる。

加えて「津波」の被害である。太平洋沿岸の漁業施設だけでなく、住居・集落すら一瞬のうちに壊滅し、今など行方不明の人々の数さえはつきりとしえない。

かつて小学校の教科書に「稲むらの火」という話が載せられていた。その大筋を記すと、「秋の一日、地震のあと丘の上で沖を眺めていた庄屋さんが「津波」の襲来に気づく、とつさに収穫が終わって庭に干していた稲の束（稲むら）に火をつける。火事に驚いた村民が丘の上に急いで登ったために津波から逃れることができた」という物語である。

「米」は生活の糧であるが、それよりも人命の尊さを優先したこと、瞬間の判断力がこの物語が語り継がれ

た理由であろう。この話は現在、市内の小学生へ「読み聞かせの会」のグループが話されるとも聞いている。

海辺では、「つなみ」であるが、山国では同様に「土石流」の災害がある。「山つなみ」とも「ビヤクがとぶ」とも呼んでいる。

明治30年後半から40年代にかけて、山梨県ではすさまじいほどの風水害の被災があった。都留市でも明治40年初狩へ抜ける「大棚」の集落で、大きな災害があったと聞く。今年「百年」のメモリアルでさかんに報道される「恩賜林」は、その時に明治天皇（政府）から山梨県へ下賜されたもので、他県では例をみないものである。富士山麓では北富士演習場のからみで語られることが多いが、元来、治山、治水などの防災の観点から管理することが目的であり、甲府、舞鶴城のオベリスク（尖塔）もその記念塔である。

古老の中には「山壊え水は逆まきて、美し田畑を押し流し…」などと恩賜林の歌をうたえる人が今でもおいでになる。

あらためてこのたびの大震災で被災された方々を支援することで、いつでもどこでも起こりうる災害に対して意識を高めていきたいものである。



毎月第1日曜日は「家庭の日」

毎月第3日曜日は「青少年を育む日」です。

青少年育成都留市民会議編集委員

連載・青少年健全育成シリーズ 第237回

「津波」

広報「つる」広告募集！

あなたのお店の広告を広報つるに載せてみませんか？
広報「つる」は、都留市内の各家庭に配布されています
(10,500部発行)ので、多くの方の目に触れます！

問合先：行政管理課 秘書広報担当

広告料金

掲載場所	印刷色	金額 / 枠	備考
裏面	カラー	20,000	2カ月掲載
内面	2色刷り	10,000	2カ月掲載

掲載月は、①2・3月②4・5月③6・7月④8・9月

⑤10・11月⑥12・1月の6パターンとなります。

掲載状況につきましては、下記をご参考としてください。
また、詳細につきましては、ぜひお問い合わせください。

広 告 掲 載 欄

広 告 掲 載 欄